

フランクフルトの都市林（シュタットヴァルト）—むかし皇帝が狩りをした場所

フランクフルトから数キロメートルほど南に位置するドライアイヒ市ドライアイヒェンハイム地区には、今日ハイン城が立つ場所にカール大帝¹の狩猟館があったそうです。何も立証されてはいませんが、どんな伝説にも真実が隠されているのではないのでしょうか？

事実、793年があと数日で終わろうとする頃にカール大帝はフランコフルト（フランクフルト）に到着しました。カール大帝と従者たちは、丘の上（今日のフランクフルト市「聖堂の丘」）にあった王宮を²宿営地にしました。彼は数千人に及ぶフランク王国の教会高位指導者である司教や祭司たちを、794年6月の教会会議に召集しました。会議では、広範囲にわたる教会問題の解決が諮られた他、穀物やパンの価格統一や、デナール銀貨を統一通貨にすることなどが取り決められました。



王宮は、国王所有の堂々とした荘園館でした。王は貴族出身者を管理人に任命しました³。時にこのような荘園（訳注：領主の直轄地）の所有地は広大であり、森林も含まれていました。

このようなわけで、フランコフルトの宮殿にも広々とした森林地域が含まれていたと考えられます。といのも、カール大帝の時代、ライン川とメイン川に挟まれたフランクフルト周辺の平野は深い森に覆われていたからです。

¹ **カール大帝**（747年–814年） 768年よりフランク王。古代以来初の西ヨーロッパの統治者として、彼の即位と共に新たにされた皇帝の座についた。フランク王国は彼の下で領土、勢力共に最大となった。

² フランクフルト教会会議の中心地だった「聖堂の丘」にあるメロヴィング王家の**王宮**は、恐らく815年によりやくカール大帝の息子敬虔王ルートヴィヒによって城館にするため拡充され、遅くとも822年には完成した。

王宮と異なり王の城館は、所属の領地を管理する荘園屋敷に加え、「**宮殿**」と呼ばれる地位を象徴する建築物と小聖堂も備えていた。中世の時代すでに生まれていた単語 pfalz（王の城館の意）とは、中高ドイツ語の pfalzen すなわち「領主の住まい」から来た言葉で、古高ドイツ語の pfalanza、民間ラテン語の palantia、中世ラテン語の palatia（複数形。建築物全部を含む）、ラテン語の palatium（「宮殿」を表す中世ラテン語）に由来する。今日この城館建築の残部は、新しく建てられた「シュタットハウス（訳注：フランクフルト市のイベントセンター）」（新・旧市街）の地下にあるフランクフルト考古学庭園で見学することができる。

³ 中世の王たちは定まった宮廷を持たなかった。彼らは大勢の従者を引き連れて帝国全土を旅して回り、**帝国領**の農園や地所に滞在した。帝国領は王領とも言われ、皇帝職に結びついたものであり、その治世の間皇帝が自由に使うことができた。皇帝の死とともに帝国領は後任者（職務上の後継者）の所有になる。家産はそれとは異なる。家産は特定の人物または君主の一族のものであり、遺産相続できる。

9世紀（850年）の文書には、ドライアイヒの御狩場⁴のことが書かれています。御狩場というのは、王だけが狩猟権を持つ地域のことです。

7世紀になるまで森の使用は自由であり、誰でも利用することができました。人々は森で薪を集め、木材を切り出していましたが、それらは当時唯一手に入る燃料であり、また極めて重要な建築資材でした。秋になると農民たちは家畜の豚を森に移動させ、どんぐりやブナの実を食べさせて飼育しました。また彼ら自身も、森で集めたベリー類やキノコ類だけでなく狩りで得た獣によって、食卓を豊かにしました。そして獣の皮や骨、毛皮からは、衣服や道具なども作られました。

しかし緩やかなゲルマン族の集団から王国や公国が形成された頃、フランケン⁵の王たちは領地の広域で一般の人々の森林利用を除外しました。そうした中でも王領付近の森では⁶、特に木の伐採と狩猟権に関して、独占的に森林を利用しました⁷。

このようにして国王と随員が王宮滞在時に必要な物資の供給が確保される一方、他方では、領国の統治運営政策としての狩りの開催は支配者たちが自らの身体能力と勇気を家臣等に見せつける絶好の機会となりました。そのどちらも、統治するのに不可欠な能力とみなされていたのです。

それゆえ当然カール大帝も、8か月に及ぶフランクフルト滞在期間中、850年の文書でドライアイヒ御狩場と名付けられた地域に馬で狩りに行き、その際には貴族階級のカトリックの高位者や世俗の権力者たちを伴わせたと推測できます。

たとえ証拠がなくても、その当時現在ハイン城が立っている場所に、例えば木造の簡素な狩猟小屋があったことは⁸明らかです。



⁴ このドライアイヒ御狩場の区域はメイン川下流に沿ってアッシャフェンブルクからリュッセルスハイム・アム・メインまで、そしてバート・フィルベルからオーデンヴァルトのノインキルヒャー・ヘーエまで広がっていた。

⁵ フランク王国の初期の王たちはメロヴィング家の一族であった。この王朝は7世紀よりライン・メイン地方も治めた。

⁶ 脚注3. 参照

⁷ このような地域は「forestis フォレストイス」と呼ばれた。この単語は7世紀半ばにフランク王国の国王文書に初めて現れた。従来狩りや森林利用が自由にできた範囲外にある地域を示すために、おそらくラテン語の「foris（外）」という語から、当時新たに作られたものである。そのような地域には、森の他、農耕地や荒地が含まれることもあった。一方で「nemus（訳注：ラテン語で林・木立ちの意）」や「silva（訳注：同 森の意）」は一般的に「森」に用いられる語として文語に残った。9世紀に狩りの重要性が高まってくると、forestis フォレストイスという名称は Wildbann ヴィルトバン（訳注：御狩場）に変わった。

15世紀より Wildbann ヴィルトバンという語は「Forst フォルスト（訳注：森）」の概念に取って代わられた。

⁸ この簡素な狩猟小屋は、950年頃に防護溝を備えた石造りの建物から成る王の狩りの館に拡充されたと言われている。もっとも新たな学術的研究によれば、この説は否定されている。

しかし確かなことは、11世紀（1080年頃）、ドライアイヒ御狩場には管理人が置かれ、いわゆる「塔のある城塞」が建てられたことです。こうした城塞は、平面図ではほぼ正方形の堅牢な居住塔で構成されており、周囲を塀と堀で囲われていました⁹。

1180年頃、王の狩りの館は拡張されました。丸い主塔、ロマネスク様式の宮殿、そして礼拝堂が建てられ、その全ての建物は前面に広い掘割がある城壁に囲まれていました。かつての居住塔は、第二主塔の役割を担いました。

城の外には、城兵¹⁰、つまり城の保護防衛を任された者たちが住みつきました。こうして城の並びに居住地が生まれました。今日のドライアイヒハインです。土塁を備えた市の城壁とその前の満々と水をたたえた堀に守られたこうした居住地は、1256年9月23日に初めて市の記録に記され、御狩場の森ドライアイヒの中心地へと発展しました。

城の拡張と時を同じくして、城の直轄領（賦役領地）も生まれました。固有の防御壁によって城兵たちの家屋敷と隔てられ、直轄領として一般的な建物の隣に、暖房付きの犬の檻までありました。その中では皇帝の猟犬たちが¹¹飼育されていました。

中世の頃に使われた「神聖ローマ帝国の犬小屋」という軽い揶揄を含んだハイン城の呼称は、この事に由来します。

1338年5月7日に、皇帝ルードヴィヒの指示により5月の裁定（訳注：中世の裁判）¹²でバイエルンに向けて書き記された長文の裁定書には、ドライアイヒ御狩場に含まれる領土の面積の拡張に関する査定、並びに皇帝の狩猟権を侵害した罪人¹³に対する刑罰の制定の他に、皇帝の猟犬である「白ブラッケ」という犬種についての段落もあります。

皇帝がドライアイヒの森で狩りをしようとする時は¹⁴、

馬で、ハインの森林管理人のもとへ行くこと
そこで耳に縞模様のある白いブラッケを見出し、
絹の綱を取り、犬を連れて獣を追うべし
日のある内に狩りが終われば、
日のある内に犬を元に戻すこと
さもなければ、後日同様にしてもかまわない。

⁹ 塔のある城塞とは、基本的に自然の土の上に建つ堅固な塔、または塔のような建築物から成る小規模な城塞を指す。

¹⁰ 12世紀より中部ヨーロッパにおいて皇帝の役人や貴族階級の者たちは、ブルクマン（訳注：城兵）（ラテン語では oppidanus, castrenus）と呼ばれた。城主から、いわゆる城塞守備、すなわち城の警備と防衛を委託された者。

¹¹ 「白いブラッケ」という猟犬の一種のことである。

¹² 通例口頭で伝えられた、あるいは審理に従って記録された歴史上の法源（訳注：裁判の根拠となり得る法形式）を、Weistum（訳注：裁定。中世における慣習法的な法の裁きまたはそれを記した文書）と言う。

¹³ 誰も御狩場で狩りをしてはならない、
皇帝とミンツェンブルク城の城代の他は。
そうでない者が狩りをすれば、片手を失った。
裁くのは森林官である。

¹⁴ 原語 birschen は pirschen「駆り立てる」と同義



ドライアイヒのハイン城の建物は、わずかに廃墟（絶対に一見の価値があります）が残っているだけです。最も古い部分であるかつての居住塔は、毎年夏に行われる有名なハイン城跡祭の演劇の舞台背景として使われ、あちこちからやって来る大勢の見物客に大変人気があります。かつての直轄領地も同様にその一部、すなわち領主館の西壁及びゴシック建築のいわゆるユンカー（訳注：地主貴族）屋敷の一階部分が残っています。その上は1850年に作り直された木骨家屋になっています。

現在も完全な姿で残っている中世期の市の城壁の中に入れば、きっと木組みの家々に縁どられたファールガッセ通りの散策や、幾つも立ち並ぶ居酒屋やカフェでの滞在に、心惹かれることでしょう。

何世紀も経つうちに、帝国の森、つまりドライアイヒ御狩場のものだった広大な土地の所有権は別の所有者に移りました。最後に帝国に残された元のお狩場の区域は1372年にフランクフルト市に売却され、今日の「フランクフルトの都市林（シュタットヴァルト）」になりました。

しかしドライアイヒ御狩場の特別狩猟権は、次の何世紀かまで存続しました。

今日のアウトバーンA5（5号線）の近くある二つの「カイザーシュタイン」（訳注：石碑）も、ドライアイヒ御狩場での狩りの最期の証と言われているそうです。



カイザーシュタインは、カール7世¹⁵が猟で仕留めた雄鹿のうちの2頭を記念して設置されました。ツェペリンハイム市区の北部に立つ石碑からは、1742年の盛大な狩りを想像することができます。二つ目の石碑はランゲナー・ヴァルトゼーという湖の西にあります。こちらはカール7世が1744年に仕留めた雄鹿の最期を偲ばせるものです。次のような碑文が刻まれています。

CARL DER VII / ROEMISCHER KAYSER HAT / ANNO MDCCXLIII DEN V. MAY / DIESEN HIRSCH PERFORCE GEFANGEN

カール7世／ローマ帝国皇帝／西暦1742年5月5日／追い猟（訳注：猟犬で駆り立てる猟）にてこの雄鹿を仕留めたり

¹⁵ 1742年1月24日バイエルン公カール・アルブレヒトは皇帝に選定され、1742年2月12日フランクフルト・アム・マインで帝位についた。1742～1745年の短い期間、フランクフルトはその居城都市となった。皇帝カール7世は1745年1月20日ミュンヘンで死亡した。.

1742年のオリジナルの石碑はもう現存しないため、現在は同じ場所にレプリカが立っています。レプリカが1744年の石碑の形状と一致するように1744年のものが手本にされたのですが、明らかにそれよりも大きくできています。二つの石の碑文は、暦年を除いて一致しています。

かつての広大なライン＝マイン地方の森林は地域の経済や交通政策の発展の過程で著しく減少してしまったので、今のこの風景からローマ時代の歴史家コルネリウス・タキトゥス¹⁶が描写した「恐ろしき森や忌まわしき沼に覆われた」土地を思い浮かべることが難しくなっていました。

前世紀の1930年代に、今日のアウトバーンA5とライン・マイン空港（訳注：フランクフルト国際空港）の建設が始まり、そのための開墾によって600ヘクタールのフランクフルト市の森が消えました。自然景観が激しく損なわれた時期でした。第二次世界大戦後早急に必要だった住宅の建設と、フランクフルト空港の面積が1964年までに倍増したことにより、その局面はさらに強まりました。定着しつつあった環境保護運動、とりわけ離陸用西滑走路建設に反対する激しい抗議活動にもかかわらず、ライン・マイン地方の大雇用提供主であるフランクフルト空港の拡張のために、相当な面積の森林が繰り返し伐採開墾されました。

1994年、フランクフルトの都市林のほとんど全てが景観保護地域に指定されました。フランクフルト・グリーンベルトの一部、フランクフルトの中心部を環状に取り囲む様々な自然空間の結合体にとって、かつてのドライアイヒ御狩場のこの部分が完全に侵害から守られているわけではありませんが。それでもなお、これにより自然体験や近郊リクリエーションの場、フランクフルトの緑地帯の一部を、次の世代のために保存するのに必要な諸条件が作られたのです。おそらくもう皇帝が現れることはないでしょうが、今でも狩りは可能です。

Eva Miller

訳：黒沢恵美子

¹⁶ プブリウス・コルネリウス・タキトゥス（西暦58年頃～120年頃）は、ローマの著名な歴史家であり元老院議員だった。